

## 寺田寅彦の自然美探索

佐竹省三

日本大学大学院総合社会情報研究科

### Torahiko Terada's Research of Natural Beauty

SATAKE Shozoh

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

I am hoping to learn how to discover the natural beauty that Torahiko Terada learned from Sohseki Natsume.

There is tremendous worth in learning the world of beauty discovered by Torahiko Terada. I think that understanding this world is most important for us to lead a useful life because learning about the world of natural beauty will open another world for us, it may lead to a path for the evolution of our spirit.

---

#### 、はじめに

この世には、いたるところに花がある。この花を私たちは床の間や花壇に据えて楽しみの一つとしている。寅彦も師である漱石に会うことを無上の楽しみにしていた。「夏目漱石先生の追憶」の中で、「花下の細道をたどって先生の門下に集まった多くの若い人々の心はおそらく皆自分と同じようなものであったろうと思われる。」（下線佐竹、以下同様）

とある。漱石に会いに行くことが「花下の細道」として表現されている。

同じような内容が寅彦の高校時代（旧制、熊本五高）にも見られる。「まるで恋人にでも会いに行くような心持ちで通ったものである。」という一文である。若い頃の情熱と漱石に対する憧れの吐露とも受け取れる。

この時期、寅彦は漱石宅に足を運ぶようになってから間もない頃で、俳句の手ほどきなども受けている。そのため寅彦にとっては、漱石はまるで恋人であり、花のような存在であったのであろう。花と仰がれる漱石の心から寅彦がどのような種子を受け取

ったのであろうか。

生涯の中で私たちも色々な人々との出会いがある。が、その中で、何一つ手にすることもなく通り過ぎてしまうこともある。反対に寅彦のような「青い鳥」を手中に収める人もいる。

以下がその一例である。

「先生からはいろいろのものを教えられた。俳句の技巧を教わったというだけではなくて、自然の美しさを自分自身の目で発見することを教わった。同じようにまた、人間の心の中の真なるものと偽なるものを見分け、そうして真なるものを愛し、偽なるものを憎むべき事を教えられた。」

と明示されている。この中には二つの種子・「美と真」がある。そこでこの種子を寅彦がどのように受け取り、蒔き、育てあげ、開花させたかを彼の作品を通して、その効用や役割、価値などを紹介したい。

#### 、自然の美しさを見出すこと

##### 1、 行動記録・「写生紀行」を前に

現代の私たちは情報化時代を迎え、政治や経済、

文化等の面までスピード化の波が押し寄せ、それに翻弄されている。矢継ぎ早にやって来る諸現象に押し捲られ、その対応に追われる余り、慌しい時を送っている。

その結果、問題解決や新たな創造への道に手間取り、苦慮しているのが現実と言えないだろうか。

交通機関や情報のスピード化は確かに数多くのメリットを私たちにもたらした。半面、デメリットもあると言わざるを得ない。その証しが、工業化による便利さがもたらした環境汚染や破壊、または農薬などによる食品公害などであろう。もちろん、これらのことに関して、専門家達は日夜、研鑽している。

しかし、これらの諸現象を多くの人々がよく見、検証しないことで問題解決や新たな創造への道が阻まれていると言えないだろうか。より多くの人々が色々な角度からこの問題を見つめ、取り上げてその対処に参画することが、解決への糸口をより多くし、スピード化に齟齬せず、新たな道への開花を容易にすると考えられないだろうか。今、私たちに課せられている事は、新しい世界への手がかりであり、創造であることは言うまでもあるまい。

このような意味から、寅彦が漱石から教えられたという「自然の美しさを発見する方法」を考えることは意義があり、価値をなすものと思えてならない。そのため寅彦の行動記録・「写生紀行」を前にし、このことにあえて触れ、以下にこの問題を試みたい。

## 2、 「写生紀行」を支えたもの

寅彦が「写生紀行」を書いた背景には、大正十年十月の玉川、成増方面への写生旅行があり、この旅が中心をなしている。しかしその心の源には随筆・「森の絵」があり、「自画像」等の絵画制作を経て、この作品が結実したと言える。

寅彦にとって、「写生紀行」への行動化はかねてからの夢であり、念願でもあった。その思い込みからか、この絵の制作過程には、「自画像」のような迷いや戸惑いは少ない。表面的には穏やかで、

エネルギッシュな寅彦はあまり見られない。作品には、むしろ安らかで楽しい雰囲気さえ感じられる。

ところで、彼の絵の制作過程について言われることは、どちらかというと科学者らしい、分析的な面がある、と指摘されている。彼自身、絵を描く気持ちを友人・小宮豊隆宛ての書簡で

「描くこと自身が面白いよりも描きながら絶えず対象の中に在る珍しい現象を発見してゆく事の面白味が寧ろ強い」

と、伝えている。「描きながら絶えず対象の中に在る珍しい現象を発見してゆく」、とは、いかにも寅彦らしい。

しかし、私達が学ばねばならないことは、このような科学的な行為以前の、もっと身近で、基本的な事柄であろう。それは自分の考えを己の意に従って行動し、実現するということである。

行なうという言葉の口にすることは容易である。が、己の欲望に打ち克ち、目標に向けて行動を起こし、達成することはそれほど容易ではない。それなのに私たちはこの問題・「行動」について、それほど重きを置いていないのが常ではなからうか。

確かに日常生活でことを行なうにはそれほど困難は伴わない。しかし人々のために、何か新しい慈善事業を始めようとするとき、そうはいかない。

ましてや、新しい企業を起こそうとか、アイデア製品を創るなどとなると、行動の足がびたりと止まってしまう。そして時の流れと共に意欲が薄れ、アイデアも枯れ、最後にはそれを放棄してしまうのが常と言えまいか。

ところで、寅彦の行動とはというと、私たちのそれとは幾分異なる。もちろんためらいや迷いはある。大正九年に発表された「自画像」の中に

「都へ出て洋画の展覧会を見たりする時には、どうかすると中学時代の事を思い出し、同時にあの絵の具の特有な臭気と当時かきながら口癖に鼻声で歌ったある唱歌とを思い出した。そうして再びこの享楽にふけりたいという欲望がかなり強く刺激されるのであった。しかし自分の境遇は到底それだけの時間の余裕と落ち着いた気分を許してくれないので、

実行の見込みは少なかった。」、

と、いう記録が残されている。絵を描きたいという夢が時として消えかかったというのである。しかしこの中には、私たち同様、ある目標が決められていた。

彼は、子どもの頃から絵を描くことが夢の一つであった。そのきっかけが随筆・「森の絵」の中に紹介されている。

「むしろ平凡な画題で、作者もわからぬ。が、自分はこの絵を見るたびに静かな田舎の空気が画面から流れて出て、森の香はかおり、鶉（ひよどり）の叫びを聞くような気がする。そのほかにまだなんだか胸に響くような鋭い喜びと悲しみの念がわいてくる。」

、  
という印象なのである。従兄弟の信ちゃん宅で見た一枚の絵・「森の絵」が明るい夢を抱かせた、というのである。

このような、子供の頃の出会いは誰にもあろう。もちろん大人になっても色々な場で経験している。

しかし、その出会いを心にとめず、すぐさま放棄しているのが現実ではなかろうか。夢や願い、あるいは希望という種子を己の心に播種しないで楽しみの芽が出るはずもない。

この当然とも思えることを私たちはしていないのが常ではなかろうか。しかし、人には色々な立場や境遇、身体的条件など、環境が整わない時もある。

寅彦の場合も「自画像」を描くまでの経緯がそのように回顧されている。それにしても私たちと異なることは、「森の絵」で受けた印象や感動の種子を大切に保存している、ということである。単に保存するばかりか、その種子を播種すべき適当な時期を選び、待ち、そして温めていることである。

その待ちわびる行為もある方法を用い、種子の発芽を促すという実践化に努めていることが大きな違いであると、私は言いたい。その昔、早春の農家で籾種を苗代に蒔く前、池や沼等に漬ける風景があった。寅彦も展覧会場でこの籾種を漬けていたのである。自分の心の中で夢を発芽させ、時期を待ちながら成長させていたのである。

その一例が都内の展覧会場へ足しげく通っていたことである。寅彦が「自画像」を描く前の自分

について、

「それから（中学時代から）二十何年の間に自分はかなり多くの油絵を目にさらした。数からいえば莫大なものであろう。」、

と回顧している。

つまり、直接絵筆を持たなくとも、絵に接することで、夢の種子を育て、時機到来を信じながら実現可能な態勢を整えていたのである。

正に、シュリーマンが八歳の時に目にした絵の夢を父や兄弟の嘲笑にも屈せず、およそ 40 数年も持ち続けたこと。その間、あらゆる困難を乗り越え、五十歳にして、その感動の夢をトロイの地で開花させ、大発見をもたらしたことに通じよう。

ややもすると、私たちは「やればできる」などと豪語する時がある。しかしこの「やれば」の中に陥りやすい、落とし穴があることを私たちは忘れがちではなかろうか。

論語の中で孔子は、弟子の司馬牛に「仁」について聞かれたとき、

「仁者其言也訥（じんに）」＝（仁とは言葉を口から出し渋る、すなわち言葉を慎んでジット耐え忍ぶところにあるものだ。）と答えている。この答えに対して、司馬牛が曰く、「其の言ふや訥す、斯（ここ）に之を仁と謂ふかと」＝（仁の義が簡単だから不思議に感じたのだらう）。「その言葉を忍ぶ、其の言うことを言い渋るぐらいで仁と言えましょうか。」と、司馬牛が反問したというのである。

この答えの中で、孔子は「子曰、為之難」＝（すべて何事も実行は難しいものだ。実行がむずかしいとなれば言いたいことも差しひかえ忍んで、言葉も出しにくくなるものではなかろうか。）と言ったというのである。

同じような諺はわが国にもある「言うは易く行なうは難し」という言葉である。このし難い言動の成就が、随筆・「写生紀行」の背後を支えていたのである。

言動が一致し難いほど、私たちには実践は難しいものである。難しいから先人に学び、己の生き方をより良い方向に導きたい、と願っているのではなかろうか。それゆえ、寅彦の行動記録である「写生紀行」を中心に据え、この問題の具体化を

推し進めてみたい。

### 3、 美しさを見出すには

「写生紀行」の内容は六章節からなる随筆である。病後のため、寅彦の行動計画は自分の体調に合わせ、季候の良いときには戸外で写生をし、そうでない時には室内で庭や静物などを描き、楽しむというやり方である。

この年（大正 10 年）の十月十七日（月）小宮豊隆宛の便りに

「……、天気はよくなるし、泊まり客も帰ったものだから、土曜日に急に思い立って絵の具箱をかかえて大宮駅まで車でいきました。有名な公園というので昼飯を食って、ぶらぶら野道を歩いて、甘藷畑の中で一枚写生をした。それから帰ろうとおもって停車場へ来ると、一時間ほど待たなければならないので、W・Cの陰の柵の上へスケッチ箱をのっけて一気呵成にブランギン式の一枚かいた。……、うちの庭ばかりよりは、やはり戸外がおもしろい。ことに今は野山の色彩が実に美しく全く酔わされます。」

と書き送っている。大正八年の暮れ近い頃、胃潰瘍のため入院し、翌九年には静養のため、勤め先（東大勤務）を休んでいる。十年の春になり、健康の兆しが見えたので、「自画像」を描き、この秋に「写生紀行」の小旅行を試みたのである。それが上記の書簡として残されていたのである。

ところで、寅彦の絵を描く目的とは「生きた自然」に親しむためだとしている。そのせいかこの時期、絵の師匠・津田清風との交流も盛んに行なわれている。同時に勤めを休んでいることを利用して・静物や二階（自宅）からの写生（風景画）をしている。もちろん体のことを気遣ったの行動であるが…。

しかし、彼の行動は絵画だけではなく、文筆活動も多くなされている。小宮豊隆との、書簡のやり取りの激しさがそれである。

「…文章も物足りないが絵のほうもいっそう物足りないので、相変わらず困っています。…」

とは、この年（大正 10 年）の七月一日の書簡である。

つまり、寅彦は「写生紀行」を試みる前に、色々

な準備運動を十分に行なっている。その一つが、前年・九年の十月、山崎直方氏へのはがきの中にも認められる。

「おかげでねていて帝展見物をいたします。御厚情ありがたく拝謝いたします。……」

という礼状である。病床にありながらも山崎氏からの絵葉書で帝展の鑑賞をしている。そればかりか、その批評まで書いている。この月の二十七日、同氏への書簡では

「毎度帝展見物をさせていただいてありがとうございます。おかげ様でどのくらい保養ができたか、……。それはさておき、どうも絵はがきを拝見していると、……駄弁を弄して尊厳を冒瀆することになるのが病氣であります。……。」

と記して、この後にかなり長い批評文を送っている。しかもこの中で、「おとうさん、何をそんなにヒトリでニヤニヤ笑っているの！いやあなヒト！」という娘の一節まで添えている。

寅彦は、このようにして病の回復期にあっても絵を見ることに親しんでいたのである。さらに山崎氏に宛てた十月二十九、三十日、十一月三日の便りでは、帝展の作品についてかなり長い、詳細な批評文を送付している。

このように、寅彦は自分の置かれた立場や状況を巧みに利用し、意志に応じた対処方法を見事に成し遂げている。健康に恵まれ、正常な場合には、直接展覧会場へ赴き、自分の眼で作品を鑑賞し、楽しさを満喫している。もちろん、寅彦はこのような行動を何度か実現している。

展覧会場を中心にし、まず他人の作品を鑑賞することは、多くの人たちも行なっている。しかし、寅彦のように自分で絵を描いている人はどれほどいるだろうか。

描くために他の作品を見るのと、単に見るだけの楽しさとは、決して同じ鑑賞とは言えない。寅彦が小宮豊隆に当てた書簡（10 年 9 月 20 日）で、

「二科へはいって見るとだいぶ空気がちがう。名もない人の中でもそれぞれのおもしろみがある。安井氏の「椿」は絵はがきで想像したのとはだいぶちがっていたが、やっぱりいい。津田君の絵はひいき目かしらないがやはり異彩を放っている。

宝石のような透明な美しさが底から光っている。」

と、二科展で目にした様々な作品の印象を報じている。

ことをなすには、各方面からの観察が必要であることはよく言われることである。しかし、単に見るだけではその奥義はもちろん、理解することすら容易ではあるまい。

寅彦は絵を描く前に他人の作品を見るばかりか、前記のように絵を見た批評文まで書いている。このような行為は自然の中で美しさを見出すことと、どのような関わりを持ち、役割を果たすのだろうか。この点について考察を深めたい。

#### 4、目は見る以上のものを見る

大正十年十月十五日の日記にも

「朝、急に思い立ち絵の具箱をかかえ、大宮駅まで行く。…、公園裏の原よりブラブラ歩き、屠牛場の裏の甘藷畑にて一枚スケッチす。三時半ごろ大宮停車場へきたる。…、W・Cの陰の柵の上で停車場内の写生をする。」

とあり、この日の「写生紀行」の概要が述べられている。かねてからの念願を実現する日の情景が、「田端で大宮行きの汽車を待っている間にも、目に触れるすべてのものがきょうに限って異常な美しい色彩に輝いているのに驚かされた。」

と、半ば興奮気味に描かれてある。このような経験は私たちにもある。しかしこの場に、仮に私たちが居合わせたとしても、同じような体験をしたであろうか、疑問が残る。

好天に恵まれた自然界には、確かに上記のような快感はある。修学旅行や遠足の日がそのよい例と言えよう。しかし心理学者の言葉を借りると、私たちが、今ここで一枚の絵・「モナリザ」を観察する時、その鑑賞の仕方は「観察者の豊かな、個人的な知識によって与えられる文脈である。」と、いう見方が働くというのである。作品の見方には、見る人の過去の経験や社会的、政治的背景を引き入れるので、それぞれの鑑賞方法が異なる場合が多いというのである。

つまり、私たちの脳は美術作品を見ることで、テ

ーマやスキーマを中心に脳内で組織化しながら見ている、と説いている。

さらに、これらのテーマやスキーマは、美術品ばかりではなく、すべての現実理解においても心の中で働いている作用だ、と付加されている。

例えば数人の仲間で登山をしたとしよう。頂上に立った時、それぞれが同じ眺望を目にしながらも、それぞれの過去の経験や知識を総動員して眺めており、その素晴らしさを味わっているというのである。

この日、田端で汽車を待つ寅彦の脳内でも、上記のような活動が働いていたのであろう。そのため、朝の風景が、「きょうに限って異常な美しい色彩」を帯びて見えていたのでは、とも考えられる。

寅彦には20年に及ぶ経験と科学者としての知識や文学、絵画、音楽などの豊かな知識があったことは言うまでもない。つまりこれらが相乗作用を起こし、

「停車場のくすぶった車庫や、ペンキのはげかったタンクや転轍台（てんてつだい）のようなものまでも、小春の日光と空気の魔術にかかって名状のできない美しい色の配合を見せていた。」

という感動を覚えさせたのでは、と考えられてならない。

このように目の働きには、実際に見る以上のものを人に見させる働きがある、というのが心理学の説明なのである。

この日、彼が目にした実景も

「婦人の衣服の人工的色彩は、なんとなくこせこせした不調和な継ぎ合わせものように見えた。こんなものでも、半年も戸外につるして雨ざらしにして自然の手にかけたなら、少しは落ち着いた、いい色調になるかもしれないと思ったりした。実際洗ざらしの鉄道工場の青服などは、適当な背景の前には絵になるものの一つである。ヴェニスの美しさも半分以上は自然のためによごれ、さらされているおかげである。」

という捉え方がなされている。

この批評の心底には、寅彦の過去における絵画経験や視覚現象についての科学的な知識の総合判断によるものと考えられよう。

一般に個人の知識や経験による知覚・認知過程のはたらく心象を心理学者は、トップダウン処理と呼

んでいる。この処理様式は、私たちが外部から入り込んで来た情報を脳内で処理する場合、目で見た感覚情報の処理が行なわれる前に、文脈や知識に基づいて、分析の進め方や仮説が決定され、それに即したデータを自分の過去の経験などから探して処理する能力だ、と紹介している。

つまり、寅彦が大宮行きの汽車を待つ間、目にした朝の景色にもトップダウン処理が行なわれていた、と考えられてならない。その結果が寅彦の批評文となり、「美しい」という言葉の繰返しになったとも思える。

ところで、私たちが色々な場でものを見ている時、このような脳内処理など、あまり気にしていない。しかしシンボルマークを目にした時にはそうではあるまい。このようなはたらきをよく意識する。

例えば、トヨタ自動車の車体の前後に表示されているシンボルマークを見た時のことを考えて見よう。私たちは、いつしかあのマークから「トヨタ」の文字を盛んに読み取ろうとするだろう。また人によっては、円の組み合わせ等を想起しようとしている自分に気付くことがある。

この心理作用が、今、自分が目にしているマーク以上のものを頭の中に描き、その映像を育み、完成させようとしているはたらきである。

寅彦の場合も「駐車場のくすぶった車庫やペンキのはげかかったタンクや転轍台」などが「小春の日光と空気の魔術にかかって、名状のできない美しい色の配合を見せていた」という認識もこのはたらきの一つと考えられてならない。

他方、「婦人の衣服の人工的色彩は、なんとなくこせこせした不調和な継ぎ合わせものように見えた。」という認知も同様なはたらきによるものと言えまいか。

そして、この二つの認知が田端での同じ景色の中にあり、前者は自然とよく調和し、後者は「不調和な継ぎ合わせ」という認知として受け取られたのではなからうか。しかも後者については、「雨ざらしで自然の手にかけられたら少しは落ち着きたいいい色調になるかもしれない」という、美を生む根源として想像を巡らされ、判断されているようだ。

このような実景に対する、寅彦の意識には、やは

り、過去の豊かな経験と知識等によるトップダウン処理がはたらいた結果では、と考えられてならない。ことによると彼の脳裏には、自然の美しさは、日光や空気、風などの自然作用によって創られ、それらの配合と調和による創造である、という考え方が息づいていたのかもしれない。

以上のことから、寅彦が漱石から教えられたという「自然の美しさを自分自身の目で発見する」という方法とは、上記のように己の心を経験と知識等によって、より豊穡にすることが第一だと、述べているようにも思えてならない。

経験を豊かにするには、人と自然との関わり合いに力点を置くことも一つの方法であろう。次にこの問題に触れてみたい。

## 5、 自然との関わり合い

寅彦が田端駅から汽車に乗り、大宮へと向かう途中の景観を、

「窓の外にはさらに清く澄みきった空の光の下に、武蔵野の秋の色の複雑な旋律とハーモニーが流れて行った」、

と描いている。このような自然の美しさを感じさせるには、車内の女学生たちの歌声(二部合唱)と、汽車の単調な基音との組み合わせがあったようだ。耳からは快いリズムがあり、目には素晴らしい眺めがあった。そしてこれらがほどよく調和し、「複雑な旋律とハーモニー」となり、寅彦に美しさを意識させた、と述べている。

しかし、彼の視覚は大宮駅から公園までのぶらぶら歩きで醜いものを捉える。それはある店に並べられた蠟細工(皮膚病)の模型である。美しくないものの中でこれほど醜いものはなく、菊人形もその一例であると、彼は酷評する。

人工的なものに比べると屠牛場の牛や豚の残骸の方が、むしろ自然の断片であるので美しい、と強調する。このような景観に比べると、誰もいない食堂の、小さな座敷からの眺めは、

「柿の葉の黄ばんだのが蠟石(ろうせき)のような光沢を見せ、庭には赤いダーリアが燃えていた。」、

と描写され、絵にならないものは一つもなかったほど美しいと、述懐している。

寅彦はこの佳景を目にした後、店の女中の紹介で、南斜面の草原へと向かう。そこからの往還路へおりる所で、

「道ばたには、ところどころに赤く立ち枯れになった黍の畑が、暗い森を背景にして、さまざまな手ごろな小品を見せていた。」

と、いう美しい景観に出会う。それも束の間、再び妙な、まがいものの人形を目にする。そのため、背後にそびえる老杉までもが不気味な景観として意識され、自然の美しさがことごとく損なわれたことを披瀝している。

一枚の絵を仕上げるのに、寅彦の胸中では、自然と人工との対比抗争が何度も繰返されている。その抗争の中で、人工の景観が自然のそれに統合され、融け合い、調和し、真の美しい姿に生まれ変わるのでは、という認識に達しているようだ。

このような自然との対話の中から、寅彦はついに甘藷畑の小高い所で、美しい風景に出会う。その取材に関わる心象風景が、

「ともかく腰をかけて絵の具箱をあけた。なんとなしに物新しい心のときめきといったようなものを感じた。それは子供の時分に何か長くほしがっていた新しいおもちゃを手に入れて始めてそれを試みようとする時、あるいは何かの研究に手をつけて、始めて新しい結果の曙光がおぼろに見え始めた時に感じるものとおなじようなものであった。天地の間にあるものはただ向こうの森と家と芋畑と、そして一枚のスケッチ板ばかりであった。」 a、

と記されてある。あたかも酒の微酔を思わせるような興奮に包まれ、珍しく、軽い空腹を感じるほどだったと、回顧している。

帰途、さらに大宮駅の構外で思いもよらない、自然の美しさに出会う。列車の待ち時間もあったので、懸命にこの風景の美しさを取り込む。その心象が

「……。構外のW・Cへ行ってそこの低い柵越しに見ると、ちょうどその向こう側に一台の荷物車があって人夫が二人その上にあがって材木などを積み込んでいた。右の方のバックには構内の倉庫の屋根が黒くそびえて、近景に積んだ米俵には西日が黄金のように輝いており、左のほうの澄み通った秋空に赤や紫やいろいろの煙が渦巻きのぼっているのがあま

りに美しかったから……。」 a、

と述べられてある。この素晴らしい瞬間の光彩をキャンバスに留めるため、寅彦は大急ぎでスケッチをする。背後で見ている人たちの声を聞きながらも、自然の美しさを掴むための抗争を始める。

人生において、自然の美しさを目にした場合、寅彦のようにすぐさま手に入れるための行動を起こすのが効果的と言えそうである。

とりわけ三十代後半頃からは、「守りの姿勢」よりも「攻めの姿勢」の方がより効果的で、エネルギーが湧き出る、とよく言われている。寅彦の場合も不思議だ、という好奇心を抱きながら、常に攻めの姿勢を整え、エネルギーを満たすような配慮を行なっている。

この日の帰途、田端駅構内でも以下のような景観を捉えている。

「田端へ着くといよいよ日が入りかけた。夕日に染められた構内は、朝見たときとはまるでちがったさらに美しい別の絵になっていた。」 a、

と記し、この素晴らしい風景が展覧会では見られない、と力説している。そればかりか、このような絵が展覧会場にないのは、画家たちが描かないためであり、そのことが不思議だ、とさらなる疑問を投げかけている。

寅彦の作品を読むとき、この「不思議」という文字によく出会う。その度に彼の、物事への積極的な姿勢と、新しさを求める心が感じられる。

このような攻めの精神のあるところには、常にさらなるエネルギーが生まれ、その繰り返しが行動の習慣化に繋がるとも言われている。このような繰り返しの行動こそ自然の中から美しさを見出す方法の一つと言えないだろうか。「継続は力なり」とは、行動の習慣化であり、この力なくして、美しさを手にすることは考えられまい。

## 6、 興味よりはやること

徒然草内百五十七段に「筆取れば物書かれ、楽器をとれば音をたてんと思ふ。……」という一節がある。何事もことに触れるということの中に利益があるのだ、と兼好が説いている。同じようなことを寅彦も十月十六日の「写生紀行」の中で

述べている。

前日、大宮での体験は、予想をはるかにしのぐ快適さを味わえたこと。さらに効果的とも言えることは、明日も浦和付近の森を歩いてみようという意欲が湧いたことである。

ものごとは、「興味があるからやるというよりは、やるから興味ができる場合がどうも多いようである。」 a、

ということを実彦は感じ取っている。自然の美しさを発見するためにも、室内であれこれと、

「空で考えるだけでは題目（テーマ）はなかなか出て来ないが、何か一つつつき始めると、その途中に無数の目当てができすぎて困るくらいである」 a、

と、行なうことのすばらしさを紹介している。

つまり十月十六日の旅は、前日の体験に触発され、その発心からの行動とも言える。日曜なので、浦和までの車中は混雑。しかし実彦の好奇心は前記のように衰えを知らない。

工員風の男が、「赤羽で今電気をたくところをこさえているが……」という会話に耳を傾け、日本語の今後のあり方や活用などについて抱負を述べている。何時、どこでも実彦の態度は、ことに触れる試みがなされている。

目的地である浦和の雑木林の出口に着き、すぐさま座り込み、キャンパスの上に自然の美しさの取り込みを始める。その抗争ぶりが、

「平成はただ美しいとばかりで不注意に見過ごしている秋の森の複雑な色の諧調は全く臆病な素人の絵かきを途方にくれさせる。」 a、

と、自然との対決に圧倒されながらも己の意思の遂行に励んでいる。

今、自分は「漱石から教えられた自然の美しさを身につける」ため、絶好の機会に恵まれていること。そのすばらしい材料を目前にし、色彩の観察と、その取り入れとに翻弄され、その美しさを捉えることに実彦は必死になっている。

自然と向き合い、その色彩を捉えるには、その美しさを探し、それをキャンパスに表現しなければならない。その抗争の目が、

「畑に栽培されている植物の色が一切れごとにそ

れぞれ一つも同じものはない。打ち返されて露出している土でも乾燥の程度や遠近の差でみんなそれぞれに違った色のニュアンスがある。それらの不規則な平面的分布が透視法という原理に統一されて、そこに美しい幾何学的の整合をしめしている。これらの色を一つ取りかえても、線を一つ引き違えても、もうだめだという気がする。」 a、

と捉え、自然美の取り込みに懸命である。

この姿は、画家というよりは、描きながら絶えず対象の中にある、珍しい現象を追い求める目であると言えよう。

ちなみに日本画家・東山魁夷の『風景との対話』の中から「郷愁」という作品を描くまでの境地を紹介したい。

魁夷がこの風景に出会ったのは、信州の茅野から諏訪へ向かう途中だった。

「川が流れていた。兩岸の草のなびく堤の上は細い道になっていて、遥か遠くへと続いている。川が遠くの方で曲がって消え去るあたりに、小さな橋がかかっていた。田園の向こうに、ゆるやかなやまなみ。」

と、風景との出会いが記されている。しかしこの川の風景が魁夷の心を捉えたのは、二つの呼び声があったからだという。その一つは、少年時代に過ごした故郷（神戸）の風景・港や船、赤レンガの倉庫のある港町だという。さらなる一つは、故郷の奥に潜む普遍的な故郷のイメージだと、魁夷は強調する。

小学校で歌った「山は青きふるさと、水は清きふるさと」という親しく、安らかな、物憂い響きの中にも、小さな小学校の、子供たちの声などが聞こえてくる、あの普遍的な故郷が、信州の川の流れにあったからだ、と吐露している。

心の中にある、強烈な夢や願望が、ある日突然、茅野から諏訪へ向かう風景の中にあった、というのである。それを魁夷は惹かれるままにスケッチしたのが「郷愁」である、と伝えている。

風景の中から美しさをとらえることは、実彦と重なる部分があると言えよう。しかし魁夷の場合には、二つの故郷というテーマがあり、それにふさわしい風景を探し求めていたことが、実彦との違いのように思えてならない。



確かに寅彦も美しい自然を捜し求めていた。そしてその中にある美しさや珍しい現象を発見してゆくことにより興味覚えていた、と自身が語っている。

大正九年四月十二日の小宮豊隆宛の便りに「描くこと自身が面白いよりも……。」と、いうくだりは前記の通りである。こんなところからも寅彦は、やはり画家というよりも科学者のだ、と言いたい。

ともあれ、このような視線で、寅彦は浦和の自然を眺め、黍を主題とした絵の描写のため、農夫の目を気にしながら丘の上の畑を何度も往復する。やがて鉄道線路の崖の上から一枚のスケッチをし、帰途についている。

自然の中にある美しさを描く場合、その美しさを求めて描く意図と、自分の描きたい心象風景を自然の中から探し求めて描く手法とがありそうだ。前者は寅彦の道であり、後者は魁夷の道であると言いたい。この二つは果たして異なる道なのであろうか？ いずれにせよ私たちが自然の美しさを手中にするには、何よりも先ず、やることが肝要であろう。二つの道はそのよき見本言えまいか。

## 7, 色彩との関わりから

寅彦の自然美探索の旅は一夜おいた十八日にも行われている。上野の北、日暮里付近が舞台である。町工場が並ぶ、古びた景色に青いペンキ塗りの新築が寅彦の目を惹く。主題にして描こうとすると、すでに二人の画学生がいた。「一人は近景に黍の行列を入れ、一人は溝にかかった板橋を使っていた。」 a、と、絵の構図を紹介している。

寅彦も近くの崖の縁に座り、「溝渠（こうきょ）と道路のパースペクティブを真中に入れたのを描いた。」

a、と、描写経緯を簡単に記している。この日は、寅彦にとって大きな収穫がなかったようだ。

家庭事情があり、天候に恵まれなかったのだろうか。十日ほど日数を送った二十九日には好天に恵まれた。

「こんな暖かい日はもうめったにないからと思って写生に出かける事にして、まず王子まで行った。それからあてずっぽうに小台（おだい）の渡しという所まで電車で行ってみました。ずいぶんうららかな日でいい気持ちでした。」 a、

と、小宮豊隆宛のはがきを出している。

この地（矢切の渡し）における寅彦の目は、新鮮な色彩と情けない色とを見比べた景観を捉えている。

「溝渠の向こう側には小規模の鉄工場らしいものの廃墟がある。長い間雨ざらしになっているらしい鉄の構造物はすっかり赤さびがして、それが青いトタン屋根と美しい配合を示している。」 a、

と、というのがその一例である。

さらに、川の崩れた水門や対岸の石垣、その上の竹やぶとその中の大榎（おおえのき）とのコントラストや点と線との対称などの色彩を捉え、「なんとも言われなく美しい」と感嘆している。

寅彦の脳内では早くも「対岸の榎と、赤い倉庫とすすきの三角形」が主題とされ、描く構図が出来上がっていた。しかし、このような構図は「絵として見る時には美しくおもしろい」が、その廃墟の背後に隠された、世の中の暗い影を寅彦は感じ取っていた。

経済界の大変動による多くの人たちの悲惨な運命を考えると、寅彦の胸は痛んだ。一つの企業が倒れる中で、他の新しい工場が建つ姿には、コントラストが見られる。その有様を竹やぶの大榎が見守っていたと、寅彦は感じ取ったのであろう。

近景と遠景の中に広げられた、過去の様々な人生模様を思い浮かべながら、自分なりの美しさをその中から抽出していたのかも知れない。

色彩心理学者・末永蒼生氏の言を借りると、寅彦は絵を描きながら会話が出来る人のように思えてならない。

絵筆を持った右脳は風景の空間を飛んでおり、かたや左脳は廃工場と新しい丹塗りの倉庫とにまつわる物語を考えているからである。池田満寿夫のようなビジュアルな人間も多才だが、漱石はもちろん、寅彦もそのような一人であろう。

この日の寅彦は、視覚（ビジュアル）のはたらきによってかなりの創造力を養っていたようだ。それは、銀色のすすきや青いトタン屋根、赤錆の煙突などの色彩構成をしながら、経済界の、ある物語を紡いでいたからである。

自然界には様々な色彩があふれている。寅彦のように色彩を求め、それに触れ、その色を自分自身で

取り込むことは右脳ばかりか、左脳の活性化にも通ずることを私たちは学ぶべきであろう。

藤村の『千曲川のスケッチ』や宮沢賢治の詩に見られる「心象スケッチ」、または、芭蕉の『奥の細道』などのように、自然の中に美しさを求めることは創造への第一歩であり、人生に豊かさと生きがいをもたらす、大きな楽しみと言えよう。

楽しみには価値があり、精神的な進化など未来へ大きく貢献するエネルギーであり、快楽や享楽とは異なると言われている。他方、快楽は一時的で、進歩発展への期待は少ないとも評されている。真の生きがいを求めるには、快楽ではない、美しさや楽しさである。その受容について考察したい。

## 8、受容と融合

「月日は百代の過客……」とは、『奥の細道』の冒頭の言葉である。しかしこの言葉のルーツが中国の詩人・李白の「故真宝後集」の中にあることはあまり知られていない。

芭蕉が細道の旅に出かけたように、寅彦も晩秋の武蔵野に出かけた。十一月二日は玉川方面へ、一週間ほどした十日には、成増駅へと足を運んでいる。

好天に恵まれた多摩川べりを寅彦は歩き回る。芭蕉が那須・湯本温泉の山陰にある殺生石を訪ねたように画材を探しながら歩いた。が、容易に見つからない。川と平行した桃畑を眺めても晩秋の影ばかり。

「少しはなれて見ると密生したこずえの色が紫色にぼくとけむったように見える。」 a、

と、視線を空に向ける。さらに畑を縫う小道を行く。その傍の榛の木も美しいと感じたが、画題にならない。

やむなく丘の上に登って下を見ると池があり、その水面に映った森の色が美しく、心が惹かれる。が、やはり絵筆を執れるような景観ではないと判断する。

芭蕉には、殺生石が、謡曲・「殺生石」に負うところがあつての探訪だったが、寅彦には何の目安もない。漱石から教えられたことだけが唯一の手がかり、美しさを求め、画材探索の歩みがさらに続く。川べりの坂道を登りつめた所でようやく「殺生石」なるものに出会えた。

「私の目をひいたのは、丘の上の畑の向こう側に

柿の木が幾本となく並んでその葉が一面に紅葉しているのであった。その向こうは一段低くなっていると見えて柿のこずえの下にある家の藁葺き屋根（わらぶきやね）だけが地面にのっかっているように見えていた。」 a、

という風景である。寅彦はこの景観を「無心でキャンパスの中に取り入れた」と書き残している。

他方、芭蕉も殺生石で、「石の香や夏草赤く露あつし」の句を書きとめている。しかし佳句と思わなかったのか、本文（奥の細道）には取り入れていない。

この日、帰途についた寅彦には、小川の流れや灌木や別荘らしい森を背負う家々の姿など、すべてが秋の色に染められ、閑寂な趣に感じられたというのである。

自然の美しさを自分なりに見詰め、取り込むことができた満足感があつたのだろうか。この日の日記に、電車に乗り込んで来た軍人を

「……帰りの電車、小学の遠足のかえりで満員、世田が谷付近で大尉と少佐がのる。大尉がゾン座ザイな言葉で話していた。少佐の胸のボタンが一つ取れ、一つはとれかかっていた。……」 a、

と、かなり詳細な描写が残されている。この冷静さは、安らぎと満足感からの、心のゆとりと考えられないだろうか。

心の窓から自然を見詰め、そこにある美しさや人生の意義を表現するのに、芭蕉は文字で、寅彦は色彩を用いている。そしてその心象を紙上に据えたのが俳諧であり、絵画なのである。

この日の制作で、寅彦は二時間余りを「無心に過ごした」と明記している。この無心や純真無垢な心は楽しさに通ずるものであろう。美しい、素晴らしい、という世界に身を置き、自分らしい色彩や言葉を探しながら新たなる、己だけの世界を創造することはこの上ない恵みであり、尽きない冥利と言えないだろうか。

寅彦にとって成増方面への旅（11月11日）もこのような境地に浸れた一日であつたようだ。その報告とも思える便りが、やはり小宮豊隆宛の書簡（12月26日）で、

「……、油絵もやる連句もやるとなると、あんまりおもしろ過ぎるので困りはしないかと思って躊躇

(ちゅちょ)している。……描く楽しみを考えるとやめられない。……」 a、

と報じている。

十日、成増駅までの風景は「一見単調なように見えるが、その中にかなり複雑な、しかし柔らかな変化」 a、をなし、その高台の地形が、寅彦には珍しく明るい、平和でのびのびした感じがし、非常に気に入ったのである。このような快さに心が弾んだのであろうか、駅近くの道をあてもなく歩くと、

「曲がりくねった道路と、その道ばたに榛(はん)の木が三、四本まっ黄に染まったのを題にして、やや複雑な地形に起伏するいろいろの畑地を画布の中へ取り入れた。」 a、

と、素晴らしい風景に出会い、その捉えた喜びを紹介している。しかも、この日の帰途、夕日に染まる、この地の景観に寅彦はミレーの名画・「種まく男」の世界を見たというのである。そのため、「美しい」、「名状のできない美しいものに見えた。」の言葉を繰り返し、陶醉状態に陥っている。

さらに、もし事情が許すなら、この広い平坦な高台に小家を建て、週に一度でもいいから田園詩の幻影に襲われないものだと、夢の境地を披瀝している。

自然の中に美しさを求め、それを切り取り、受容し、自分らしい、新たな世界を構築する。そればかりか、自分自身までもが、その中に浸り、統合され、渾然一体となることを願い、夢見ている。まさに融合の果てにある、美しさの感得融合し、とも思えてならない。

## 、おわりに

人間にとって、アイデアが湧くかどうかは、対象に己が触れ、それに触発されるだけではなく、積極的な行動を試みるか否かの問題であろう。

寅彦のように見る、聞く、触る、匂いを嗅ぐ、そして描くことは、自然の美しさを見出すための当然の行為であり、実践と言えるかもしれない。しかしその対象・「自然」との合一や融合を目指す姿は、まさに創造性の高さを示す歴史的な人物と言えよう。古人にもこのような人たちは多くいた。西行や世阿弥、利休や芭蕉などがその例と言える。

ねがわくは花の下にて春しなむ

そのきさらぎのもちづきのころ a、

とは、西行の歌である。西行は家や身分を捨て自然を友とし、一体化を目指した一人である。同様に芭蕉も武士や故郷を捨て、西行などに学び、自然を愛し、旅に生きた。

此道や行人なしに秋の暮れ <芭蕉> a、の句は、旅に生きた芭蕉の象徴とも言われている。

そして、漱石も芭蕉に学んだ一人だと、寅彦は記している。

「夏目先生の自然観は芭蕉のそれによく似ている…」 a、

と言った、一弟子の言葉である。さらに、この言葉を機にし、漱石の自然美の捉え方まで紹介している。

漱石は、決して自然の中に酔うようなことがなかった事をまず上げている。次に自然を純粹に客観的な冷静さで眺めるのではなく、人格化し、自然と人間とが直接抱き合うように捉えていたというのである。そして芭蕉同様に「人を愛する心が濃くなれるほど」 b、自然に親しみ、触れ合い、そして寂しさが増し、旅に出たかったのだろう、と寅彦は書き残している。

自然と親しみ、触れ合い、そして統合し、己と自然とが融合し、一体化を願う、という過程は、一種の人間愛を示すバロメーターである、と思えてならない。漱石の

堇ほど小さき人に生まれたし <漱石> b、

という句も、その一例として考えられないだろうか。小説・『草枕』や絵画なども人間味に溢れ、自然がまるで人間のように描かれている、と寅彦も加筆している。

以上のことから、寅彦の、成増界隈での佳景の願望と夢・「田園詩の幻影」も西行や芭蕉の生き方に習い、負うものがあつたように思えてならない。

漱石には、四つの夢・「美的理想、真に対する理想、愛と道義に対する理想、莊嚴に対する理想。」 b、があるとされている。その一つ・「自然の美しさを自分自身で発見する方法」を、寅彦は学び、実践した記録が「写生紀行」である。

ともあれ、この作品の中に息づいていたものはわ

が国、固有の伝統美と科学の力とによるものように思えてならない。

身近な事象や自然から様々な問題や美しさを見出し、あますところなく探求することが、寅彦の姿であり、個性とも言い得るようだ。彼の自然美探索は、絵画ばかりではなく、俳諧(連句)の世界にもある。このことは今後の課題としたい。

『天才の読み方』 齋藤孝 大和書房  
 『論語』 吉田賢抗 明治書院  
 『日本古典文学全集・方丈記、徒然草、他』 永積安明、他 小学館  
 『生体リズム健康法』 田村康二 (株)文芸春秋  
 『五感生活術』 山下柚実 (株)文芸春秋  
 『天才の勉強術』 木原武一(新潮選書)(株)新潮社  
 『脳を育てる』 高木貞敬 岩波書店(新書)

## 注

- ～ 寺田寅彦『寺田寅彦全集』(第六巻)  
 、 、 ～ , 岩波書店  
 a～ a  
 a～ a、 同上、 同上、 (第三巻)  
 a～ a ,  
 、 同上、 同上、 (第一巻)  
 、 同上、 同上、 (第二巻)  
 、 ～  
 a、 a , 同上、 同上、 (第十五巻)  
 , 同上、 同上、 (第十四巻)  
 、 小林惟司『寺田寅彦の生涯』 東京書籍  
 、 ロバート・L・ソルソ  
 鈴木光太郎、小林哲生共訳  
 『脳は絵をどのように理解するか』 (株)新曜社  
 a、 佐々木信綱、他『山家集』 朝日新聞社  
 a、 岩田九郎『芭蕉、俳句大成』 明治書院  
 a、 b、 寺田寅彦『寺田寅彦全集』 岩波書店  
 b、 (第十七巻)  
 b、 福田清人『夏目漱石』 清水書院

## 参考文献

- 『寺田寅彦全集』 寺田寅彦 岩波書店(全17巻)  
 『創造力事典』 高橋誠編者 日科技連出版社  
 『自分を活かす色、癒す色』 末永蒼生 東洋経済新報社  
 『風景との対話』 東山魁夷(新潮選書)(株)新潮社  
 『奥の細道』 松尾晴秋 開文社  
 『イメージの基礎心理学』 水島恵一、上杉喬 誠信書房